風の末裔シリーズ・1st シーズンの4

～続・あなざぁ・すとおりぃ～

パオの隙間から朝の弱い光が洩れている。
イルアルティは目を覚ました。昨日の興奮が覚めやらない。慌ただしい夢の中にいたような一日だった。
枕元に贈り物が山積みになっている。周りには、お祝いの宴で食べ過ぎ飲み過ぎの兄姉達が、まだ夢の中だ。
昨日、この辺り一帯の部族が集っての、大競馬(くらべうま)大会が催され、大人の部に初出場した十二才の女のコが圧倒的勝利を飾って、一同を唸らせた。もっとも、子供の部ではもう勝負にならなくての大人の部出場だったので、大概の者は納得した。
「あの部落には風の申し子のような子供の騎手がいるぞ」
そういう噂は近隣に浸透していた。
何せ、他の乗り手では箸にも棒にも掛からなかった馬でも、イルが乗ると脚に羽根が生えたように走るのだ。
それでも各部族を代表した名馬名騎手に混じって勝てるなんて思わなかった。イルは昨日のゴールの瞬間を反芻した。
枕元のお祝いの品を手に取る。賞品のお酒は部落の皆に振る舞ったし、羊は家族の物にした。お菓子は部落の小さい子から順に配っていると、イルの手元にはなくなった。
それを見ていた兄姉達が、お祝いと称してくれた、羽根飾りやボタン、お父さんがくれた飾り鞭、お母さんがくれた刺繍のスカーフ。
「あれ?」
見慣れぬ包みに目を止めた。
「昨日、こんなのあったっけ?」
小さな座布団位の大きさで、上等の羊皮紙にくるまれている。
「族長か、他の偉いヒトが、眠っている間に来たのかしら?」
イルは包みを持って、そっとパオの外に出た。
朝陽はまだ半分出るか出ないかだ。物音で兄姉達を起こしちゃ悪いし、明るい所で見てみたい。
石の椅子に腰掛けて包みを開いてみる。
「わあぁっ……!!」
後は声にならなかった。中身は新品の乗馬用のズボンだった。しかも、イルが見た事もないような、豪華な美しい作りだ。
この空色のすべすべの布は絹かしら? お尻と内股の当て布は、真っ白な貂(テン)の夏毛皮だ。脇にはやはり白い絹糸で、花の刺繍が施され、腰紐の末には、濁りのないトルコ石が使われていた。
イルはそれを広げてしばらく眺めていたが、お陽様が地平からすっかり顔を出した時、やにわに包み直して、厩(うまや)に

走った。そうしてそれを、自分の馬具箱の奥に突っ込んで隠した。

族長じゃない。あそこの放蕩息子だって、こんなに凄い品は、履いていない。この辺りの部族だって似たり寄ったりで、こんな品物は存在しないだろう。

駆け込んで来たイルを見て嬉しそうに鼻を鳴らす馬達を順に撫でながら、ふうっと呟いた。

「あのヒトかもしれない…」

これもまた、兄姉や他の人に、知られてはならない種類のモノなんだ……。

風に乗って草原を駆ける草の馬…、その背に乗る、蒼い髪の色彩の薄いヒト達……

お父さんは、大人になったら見えなくなったと言っていた。しかし、イルは、年を追う毎に、その存在がはっきりと、身近になってきたのだ。

昔は遠くから眺めているだけだった。それがだんだん近くなり、足音や息遣いが感じられるようになった。

初めはお父さんに打ち明けていたんだけれど、ただ心配させるだけ、と言う事が分かってからは、黙っている。

お父さんはイルを自分の子でいて欲しいから……。
そして最近、その中で明らかな視線を感じ出した。
昨日もいた。
馬群を抜けて先頭に立った瞬間、一瞬、視界の端に…観衆の中の何処かに、群青色の長い髪の、背の高いヒトが……。
さすがに十二才ともなると様々な分別は付く。周りと同調しなければいけない事、本当の事でも、口にしない方がいい事。だから、草の馬のヒト達の事は見えるけれども無視し、多分それに関わる物品も、人目から隠した方がいいのだろう。
でも今日、こんな贈り物を貰ってしまって、イルの頭の中にあった一つの思い至りが、一歩前に出て来た。
「あのヒトが…イルの本当のお父さんかもしれない…」
昨日頑張ってくれた愛馬の首を掻きながら、そっと語りかけた。馬はフルルと、鼻を押し付けてきた。
兄姉達が起き出した気配を感じて、イルはパオに戻った。今日のお仕事が待っている。

パオの背後の高い楡の木の天辺に、二つの人影が揺れた。
「聞きましたか？　お父さんだって、お父さんだって！　ふふふ…♪」

群青色の長い髪の背の高い人影が、うきうきと小躍りしている。

「そんなに嬉しい事ですか？　兄様」

もう一人の、たおやかな女性の人影が、苦笑しながら言った。

「当然です！　私は赤子の頃から、ずっとあの子を見護って来たんですよ。父親みたいな気持ちで」

「…だからって、あんな場違いなモノを贈るなんて…。困っていたではありませんか？」

「でも包みを開けた時、嬉しそうだったでしょう。そもそもあれは貴方があの子の為に縫ったモノですし」

「それはそうですが…」

包みを開けた瞬間の喜ぶ顔を見たいから…って、それでは自分の子供の誕生日に、印度の鼻の長い巨大な動物を贈ったテムジンと、同じじゃないの。あの時も、彼の息子は喜んだけれど、後が大変だったんだから！

「正確にはイルの母親に縫ったモノで…刺繍は後から刺したのだけれど、彼女の好きだったカタカゴの花を。でも、贈るのは、もう少し大きくてなってからと思っていたのに」

「まあ、いいじゃありませんか、もう贈っちゃったんです」

テムジンは、自分と蒼の長は、似た所があると言っていた。似た所どころか、鏡に写したようだ……。女性は、小さく息を吐いた。

陽が昇り、イルは兄姉達と、羊を追って出掛けて行った。

それを見届けてから、二人は手を延ばして、空で遊んでいた二頭の草の馬を、呼び寄せた。

「蒼の里には寄らないのですか？」

「今、遠征準備で忙しくて…　兄様がイルの一大事って鷹の手紙を寄越すから、取るものも取りあえず飛んで来たんですよ。まさか運動会だったなんて」

二人は馬を並べて空を歩き出した。

「一大事でしょう。年に一度の晴れ舞台です。他の子供は家族をあげて応援して貰えるんですよ。せめて二人で見ていてあげたいじゃありませんか」

それって、父親というより、孫バカの好好爺(こうこうや)に近い…と感じながらも、勿論そんな事は口に出せない。

「……あの子には、立派な両親や兄姉達がいるではありませんか」

「それはね、確かに素晴らしい父親だし、良い家族ですよ。でも、あの子にとってはどうなのかって事です」

「……」
「七つの時に自分の出自を知ってから、あの子の心は、家族に寄り掛かりたくても、寄り掛かれなくなったんです。いつも寂しさと背中合わせだ。気付かれなくても、せめて見護っていてあげたいんですよ。本当は寂しくなんかない状態に、していてあげたいんですよ」
「……」
「変ですかねぇ……」
「……いえ、…そんな事は…、私が兄様にお頼みした事です。そんなに想って貰えているなんて……感謝します」
女性は、今何か思い出しそうになった。…何だったんだろう？遠い昔、自分も独りぼっちで寂しかった時、誰かが、そんな感じで、見ていてくれたような気がする……？
「あああ――!!」
兄の叫び声で思考が中断された。
「どうしたの？」
口をぽかんと開けた兄の、震えながら指し示す地上にイルがいて、馬に乗った少年が近寄っている。
昨日大会に出ていた族長の息子だ。真っ赤になってドギマギしながら、イルに野の花を束ねた物を差し出している。
昨日はおめでとう、とでも言っているんだろう。可愛いもんだなあ。
「駄目です!!　そういうのはまだ早いです!!　許しません!!また、あの小悪童…!!」
兄の草の馬のたてがみが、ざわめいた。いざとなったらどうやってこのヒトを止めよう…と、妹は本気で思案したが、イルはあまり関心なさそうにお礼を言って花を受け取り、困った感じでそれを見つめていた。
「大丈夫なようですよ、落ち着いて下さい、兄様…」
今からこれじゃ、あの娘がこの先思春期に入ると、どうなることやら…。
「いや……つい、…ダメですね…」
兄の婚期を遅らせているのは、間違いなく自分のせいだ。背中の薄く細い羽根を揺らしながら、妹は、せめて出来るだけゆっくり歩いて、兄に付き合ってあげる事にした。
呼ばれたのは運動会だけの理由じゃないんだろう……。

～おしまい～

二〇〇九・六・三〇